博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	滝澤みか
論 文 題 目	流布本『保元物語』『平治物語』の成立と物語の変遷 ―室町・戦国期の文学と社会の連動を背景に―

審査要旨

本論文は『保元物語』および『平治物語』の諸本のうち、流布本と称されるテキストを対象として、その成立について室町・戦国期の文学や社会の状況との関連を視野に論じたものである。両作品は、成立以来、幾度にもわたる改変を繰り返しつつ読み継がれてきたが、江戸期に流通した流布本テキストは、古態を追求する現代の研究対象からは正当な存在価値が見出されてこなかった。しかしながら本論文は、流布本の成立時期を十五世紀半ばから十六世紀半ばであることを論証したうえで、室町・戦国期という「動乱」の社会の中で、それが従来のテキストとは異なる主張を明確に意図して発信すべく改変されたものであることを論じる。本論文では、『保元物語』および『平治物語』の諸本を細部にわたるまで徹底的に精読し、それら相互の詳密な比較検討を経て、流布本両物語がいかなる方法や意図をもって物語の改変を行い成立したものであるかを明らかにしており、手堅い結論が導き出されている。またさらに本論文は、流布本成立以後の近世、近代における『保元物語』『平治物語』の受容にも考察が及び、絵巻から教科書、児童書に至るまで、両作品が時代の推移とともにいかに享受されていたのかを検討することを通して、戦いを題材とする軍記物語というものの社会におけるあり方を辿り、その存在意義に迫る。緻密な読みに支えられた考証と、文学の根本意義を追究する視点の広がりを有する重厚な論文である。

論文は、冒頭の序章に続き合計三部から構成される。まず序章では、本論文の研究対象である『保元物語』『平治物語』の伝存諸本の状況と、それらをめぐる戦後の研究史を整理し、両物語の流布本について積極的に取り組む研究が多くはなされてこなかった状況を指摘する。続いて本論に入り、第一部「流布本『保元物語』『平治物語』の成立」は三章から構成される。第一章「流布本『保元物語』『平治物語』の誕生」では、従来未詳とされてきた流布本の成立下限について、流布本からの引用を多く含む『榻鳴暁筆』の成立年代に鑑み、1550 年から 1560 年前後とする見解を提示する。また、流布本『保元物語』『平治物語』双方に共有される表現が存在することから、両物語が相互に関連を有しながら一具のものとして成立したものであることを論じる。続く第二章「流布本『保元物語』『平治物語』の特性」では、流布本『保元物語』が〈秩序〉を、一方の流布本『平治物語』が〈武士の振舞い方〉に価値を置く姿勢を基準としていることを指摘し、源為義や源義朝といった人物の造型や、女性子どもの哀話の語り方にその特性が現れているとする。そして第三章「流布本から見た〈保元物語〉〈平治物語〉の変遷と本質―先出諸本の享受―」では、流布本両物語が先行する諸本をいかに改変し、新たな物語世界を構築しているかについて、〈武〉に関わる表現を例として検討するとともに、流布本『保元物語』は〈動乱の始まり〉を、流布本『平治物語』は〈安定の始まり〉を説くものとしてそれぞれの物語の本質を捉えており、そこに流布本両物語の歴史認識が反映していると説く。

以上のように、流布本両物語の成立時期やその特性、先行諸本との関係や改変の意図を明らかにした第一部を受けて、第二部「流布本成立以降の〈保元物語〉〈平治物語〉の展開」では近世、近代における両作品の享受について、未紹介のものを含む関連資料の意義を解き明かす。第二部は二章からなる。第一章「近世における『保元物語』『平治物語』の受容―絵画と写本の世界から―」では、早稲田大学図書館蔵『平治物語絵巻　六波羅合戦絵巻』やセンチュリー文化財団蔵（斯道文庫寄託）奈良絵本改装絵巻『平治物語』といった近世の絵画資料や、近世後期の小浜藩藩士津田葛根の識語を有する早稲田大学図書館蔵写本『保元物語』『平治物語』について、翻字を含む

氏名　滝澤みか

詳細な資料紹介とともに、両物語テキストの享受の諸相を辿る。関連する絵巻や奈良絵本、また津田葛根という人物の学問や著述との関係について、日本各地に散在する資料を博捜し、実地調査に基づきそれら各資料の性格や意義を明らかにした各章は、論者の資料調査および資料読解の力量の水準の高さを証するものとしてとりわけ評価に値する。また第二章「近代における『保元物語』『平治物語』の変様」は、明治期以降、昭和に至るまでの教科書や児童書などにおける両物語の出現について取りあげ、時代や社会とともに移りゆく文学の役割を、実例をもって論ずるものである。

第三部「室町・戦国期の文学と社会―流布本生成に至る土壌―」は、再び室町・戦国期に立ち返り、当時の言語や著作との関係から流布本の存在を位置づけるものである。第三部は二章から成る。第一章「室町・戦国期の文学の表現世界」は、流布本『保元物語』『平治物語』の語句表現が、十五・十六世紀の他の文学作品にも共通して使用されている状況を取りあげ、個別の作品を超えた表現世界の連なりを指摘する。また第二章「室町・戦国期の文学と社会の連動―乱世意識・教訓との関連―」は、両物語と緊密な関係を有する『榻鳴暁筆』の諸本の状況を整理しつつ、そこにみられる乱世への意識を指摘し、また「血気の勇者」という表現をめぐる室町・戦国期の用例を集め、軍記物語のみならず、教訓書類との表現の重なりや語彙の推移を明らかにしていく。

以上のように、本論文は着実な本文比較や数多の伝本調査に基づき手堅く立論されたものである。そして、著名な作品でありながら従来学界が明らかにしてこなかった流布本の存在意義を明確にした功績は高く評価されよう。なお公開審査会においては審査委員より、流布本両物語が成立した具体的な場や環境についてはどのように考えうるかという質問や、同時期に行われていた他の軍記物語の改作、改変との関係についても視野に入れるべきであるという指摘、また、文学とその時代性を述べるのであれば歴史など他分野の先行研究の成果をもさらに網羅的に消化したうえで論じるべきではないかとの意見も出された。しかしながら、課程内の限られた時間の中で精力的に調査研究に取り組み、次々と数多くの論文を公にしてきたことに加え、流布本『保元物語』『平治物語』の成立下限を特定したことなど今後の関連の研究において必ず参照されるべき成果が提出されており、本論文が有する学術上の意義は揺るがないものである。よって、審査委員会は全員一致して、本論文が博士学位の授与にふさわしい論文であることを認め、ここに報告する次第である。

公開審査会開催日	2018年　11月　24日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	文学学術院・教授	河野貴美子	和漢比較文学	博士（早稲田大学）
審査委員	文学学術院・准教授	和田琢磨	日本中世文学	博士（早稲田大学）
審査委員	教育・総合科学学術院・教授	大津雄一	日本中世文学	博士（早稲田大学）
審査委員				
審査委員				